

鏡よ、鏡

現代の鏡はガラス製がほとんどです。ガラス製の鏡は映りがシャープで、汚れても拭き取るだけできれいになります。しかし、ガラス鏡が普及する前の金属製の鏡は違いました。

今回紹介するのは、銅製で柄がついた鏡（以下、銅鏡）です。明治30年代に浜益区の白鳥番屋（ニシン番屋）の親方だった白鳥浅吉氏のご子孫から本年寄贈されたものです（写真①）。

寄贈の際、この鏡はすっかりさびて曇っていました。銅製ですから、緑青と呼ばれる緑がかったさびが多く見られました。

さて、一見するともう鏡として機能しないように見える銅鏡ですが、実際どれだけ鏡として使えるのか、磨くことにしました。

作業には、紙やすり・精密やすり・研磨剤とクロスなどの現代の道具を使用しました。はじめに紙やすりでさびや大きな傷を落とし、次に細かい紙やすりと精密やすりで細かな傷を消し、最後に研磨



写真① ナンテン模様の裏面
(左側に「津田薩摩守」の文字が入っている)

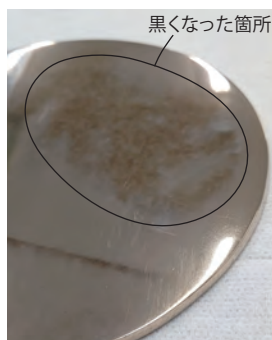
剤とクロスを使って傷が目立たないように磨き上げました。磨けば磨くほどきれいになる半面、小さな傷が目立ち、くつきりとした像が映るようになるには1、2週間を要しました。

こうして磨き終えた鏡ですが、左側が一切触れていない状態、右側が磨いた状態です（写真②）。左側が曇り、ところどころ黒ずんで見えるのに対し、右側は白く（実際は金色）なっていることが分かります。姿を映すと鏡としての役割は一目瞭然で（写真③）、正面から撮影すると、磨いた半分にはくつきりとカメラが映りました。このようにきれいに映ると、銅鏡が鏡として使われていたというの納得です。

ちなみに磨いてから何もしないで様子を見たところ、1カ月で黒くなる部分が出てきました（写真④）。この状態でもまだ鏡としては使用できますが、少し不便ですね。

映画などで鏡の手入れをする女性をたまに見ますが、昔の鏡は日常的な手入れが欠かせなかったのでしょう。部屋の装飾品としても美しい金属鏡、もしお持ちでしたら磨いてみてはいかがでしょうか。

（坂本恵衣）



写真④ 1カ月経過した状態



写真③ 鏡に映ったカメラ



写真② 鏡面



石狩市学芸員
坂本恵衣 Kei Sakamoto

専門は文化人類学。地域信仰について調べるとともに、石狩の人々の生活の中で宗教がどのように考えられていたのか、歴史的変遷などを研究する。